

多彩な個性がお出迎え。こだわりの手仕事大集合

手づくり市　あの手この手まつり実行委員会　― 八頭町 ―

全国から手づくりの店が180店！
好きや得意を活かした店主の「こだわり」が、直接、手から手へ渡される。
人と人との出会いも行き交う手仕事の祭典「手づくり市　あの手この手まつり」。

顔と顔が見える関係性の中で作り手から買い手へ商品が渡る

全国から180店の手仕事が集まる

八頭町立八東総合運動公園屋根付多目的広場を会場に、年に一度２日間にわたって開催される「手づくり市 あの手この手まつり」。９回目となった2026年は過去最多の出店数となりました。「今年は、全国から200店を超える応募があった中から180店を選考しました。昨年は140店でしたが、一人でも多くの方と祭りを共にしたいと思い会場のレイアウトを何度も見直して決めました」と、実行委員長の青木学さんはいいます。



芝生では参加者が繰り広げられるパフォーマンスを楽しむ

メンバーは10人。県外からの店を多く受け入れている理由は、地元の人がより多くの「手仕事の良さ」に触れる機会をつくりたいからだと話します。

手から手へ、商品を渡す関係を大事に

青木さんのものづくりとの出会いは鳥取県立智頭農林高校時代。20代で大工仕事などを学び、やがて、ひょうたんを使った雑貨づくりに取り組むようになりました。

地元のクラフト作家たちが開いていた「鳥取クラフトキャンプ in 八頭」の運営を受け継ぎスタートした青木さん。「お祭りをやることだけは決めて。市がお祭りらしくなる中で、人と人との繋がりの良さが見えてきた」と青木さんはいいます。「今はネット通販も普及しているし、レジの自動化も進みました。そんな今だからこそ、手から手へ商品を渡す顔の見える関係性を大事にしたい」と楠直子さん。「あの手この手まつり」という名は楠さんのアイデアで生まれました。

祭りを手づくり！
実行委員会メンバー



青木（あおき）　学（がく）さん
実行委員長・クラフト作家＆農業経営



小倉（おぐら）　千春（ちはる）さん
実行委員会メンバー

「子どもから大人まで
楽しんでもらいたい！」



楠（くすのき）　直子（なおこ）さん
実行委員会メンバー

手仕事の良さや、その価値を知ってほしい ―

会場には、アクセサリーや服飾、革製品、日用雑貨などのハンドクラフトの店や、食べ物の店が軒を連ねます。そして、この祭りの大きな特徴は、並ぶのが「モノ」だけではないこと。香りやマッサージ、占い、音楽など多種多様な表現が会場を彩ります。売り手と買い手の会話はもちろん、来場者どうしの何気ないやりとりから生まれるつながりも祭りの醍醐味です。

手づくりの価値とその価格への気づきを

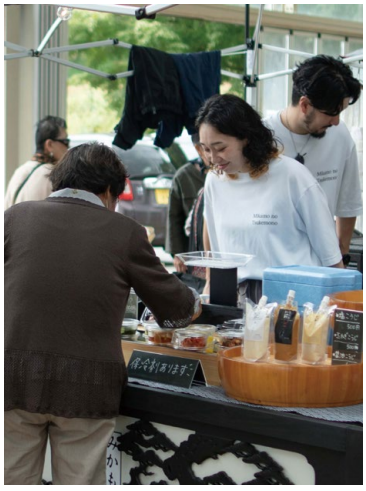
「こだわりづくしの中で、特にこだわっているのは食べ物です。今年は50店以上が参加しています」と話す小倉千春さんは、自身も八頭町で体にやさしい自然食材を使った飲食店を経営してきた経験者。「そう、加工食品や冷凍食品がすべてよくないとは思っていませんが、せっかくの手づくり市。こだわりがある出店者を受け入れています」と楠さんが続けます。「自分たちも田んぼを耕して無農薬で米作りをしてきたので、そんな経験から生まれた思いでもある」と青木さんがうなづきます。

以前、お客さん数人から「来年までに“あの手この手貯金”をしておくね」と言われたことが忘れられないと青木さん。手づくりの商品は大量生産が難しく、決して安いものばかりではありません。一方で、手入れや修理をしながら長く使えるという良さがあります。青木さん自身、商品の価格設定の難しさに向き合いながら、クラフト作家兼農家として活動を続けてきました。作り手の仕事の価値について考えてもらえる機会にもできればと話します。





音楽で盛り上がるステージ。手づくり野外音楽フェスティバル「SUN LIFE」のクルーたちも音楽は祭りに欠かせないと初回から参加する



食品を買い求める様子



作り手と相談しながら商品をオーダーする場面も



ナイトマーケット＆バーは作り手にも買い手にも大好評



楠さんが手がける音楽ステージのデコレーション。夜も昼間とは違った迫力がある

日暮れてなお、熱を帯びる―。

ひかるメンバーの手腕

会場の飾りつけは、楠さんの技が光ります。「廃材や植物を見つけてきて飾りつけています。『その草なら家にたくさんある』と、スタッフのお父さんが庭の草を刈って持ってきてくれたこともありました」と楠さん。一見、使い道がないようなものでも、身近にあるものを工夫して活かす。そんな「あの手この手」の精神は、会場の隅々にも息づいています。



ナイトマーケットに映える青木さんのひょうたんランプ

青木さんにとって、昨年の祭りは特別でした。これまで運営で手いっぱいでしたが、初めて店主として小さな自分のブースを構えることができたからです。「自分の作品に興味を持って質問してくれるお客さんのキラキラした目は忘れられません。自分のこだわりを直接伝えられたこともうれしかったです。商品をオーダーいただくご縁もあり、特別な時間でした」と青木さん。そして昨年はじめて試みた夜の部、ナイトマーケット＆バーでは、青木さんの作ったひょうたんランプが温かなひかりで会場を照らしました。

手から手へ、好きがつながる

「毎年、当日になると『ああ、今年も祭りが終わったな』と思うんです」と小倉さん。祭り当日は、事務作業などを通して運営を支えてきた一年の終わり。ほっとするひとときを迎えます。「今年の新しい試みは、挑戦者のブースを設けたことです。出店料を抑えた小さなブースをいくつか設け、出店へのハードルを下げる工夫をしました。」と続けます。

「この祭りが、ただのマルシェや一過性のイベントで終わるのではなく、参加者が手仕事の温かさや楽しさ、多彩なこだわりに触れる中で、『自分の好きや得意を伝えてみたい』という気持ちが生まれるきっかけになってほしいです。それが人から人へ伝染してほしい」そう話す青木さんが思い描くのは、いつか八頭町に、個性豊かなハンドメイドの商店が軒を連ねるまちができること。「そんな地域ができたら楽しいだろうな」と、はにかむように笑います。

Contact

手づくり市 あの手この手まつり実行委員会
TEL：090-9063-4975（青木　学）
E-MAIL：info@anote-konote.com

活動の様子はこちらから▼